

XXXX年二月三日、午後十一時四五分。  
愛しいあの人の誕生日まで、あと僅か。

キャバッローネ邸前——

ここまで送ってくれた部下に礼を言い車を帰らせると、  
大きなドアの横にある呼び鈴を鳴らした。

白い息を吐きながらしばらく待つとドアが開き、よく  
見知った顔が覗く。

「今晚は、ロマーリオさん。どうもお久し振りです」

「いらっしゃいます、ボンゴレ10代目。こちらこそお久し  
振りです。さあ、寒いですからどうぞ中へ……」

ロマーリオはツナの顔を見て優しげな笑みを浮かべると、  
扉を広く開け屋敷の中に招き入れた。

「朝からボスが首を長くしてお待ちかねですよ」

「すみません、本当はもっと早く来たかったですけど、  
なかなか用事が片付かなくて……」

敬愛するボスがずっと心待ちにしている客の来訪に、  
まるで自分の事のように嬉しそうにしているロマーリオの  
後について、ツナはコートを脱いで片手に持ち、屋敷の中に  
歩を進めた。

「そんな、謝らないで下さい。10代目に就任されたばかり  
ですからいろいろ大変でしょう。お忙しい中ボスに会いに  
来て下さってありがとうございます」

「いえ、誕生日のお祝いは今まで通り直接言いたかった  
から……オレの方こそ無理言ってこんな遅くにすみません」

「これくらい無理でも何でもないですよ。むしろ大歓迎です。  
パーティーが始まってからではボスも貴方もお二人でゆっ  
くりするのは難しいですしね。それに、こちらこそまだ  
貴方がお若い頃からボスも私達もよくお世話になってました  
から……ああ、そういえば」

ロマーリオは何かを思い出したようにビタリと足を止める。

「ロマーリオさん？」

「あれからもう十年も経ったんですね」

「はい。ディーノさんとオレが初めて出会ってから、十年……」

ディーノと初めて出会った頃は「マフィアになる気なんて  
ない」と頑なに言っていたツナだったが、十年の時を経て、  
自らの意思で正式にボンゴレを継ぐ事を決意し、数ヶ月前に  
就任式を終えたところだった。

10代目に就任したツナはイタリアに渡りボンゴレ本部を  
本拠地とし、本格的に帝王学等を学びながらボンゴレを  
担っていくのだろう。